aller と venir
－ダイクシスから動的主体間関係へ－

小　熊　和　郎

はじめに

aller，venir という動詞は，発話時（T），発話者（S），発話状況（Sit）の座標との関連で位置づけることができるダイクシス（直示語）の代表的な例としてしばしば言及され，空間的・時間的・概念的な用法を持つ．以下では，フランス語の aller / venir を中心に分析を進めるが，同時に他のロマンス諸語との比較，行ク / 来ル，go / come など系統の異なる言語事象との共通点，相違点も今後の研究プログラムとなるであろう[1]．

本稿では，優れてダイクシス性を持つ当該動詞の多義性の分析を通じて，< 主体のポジション配置 >（通常は「視点」という名称が与えられる）の問題系を論じる．< 主体のポジション配置 > はダイクシスの問題系を超える広がりを持つ．< ポジション > は aller と venir のすべての用法において固定しているのではなく，基本スキーマとバリエーションからなり，動的に構成されていくことを示したい．関心の中心は，特に準助動詞用法（発話時との「近接未来」以外に様々なモダリティ含意のある aller ＋ inf（「異常なふるまい」，「特徴付け」，「語り」，「婉曲」などの用法），「近接過去」venir de のテクスト内での出現条件，二つの文脈をもつ venir à，「可能・偶然・強調」（TLF）の venir ＋ inf など）であるが，これら不定詞を従える用法と空間用法の aller à ＋ 場所 / s'en aller, venir de ＋ 場所との関連を解きほぐすことも課題となる．その際，空間用法がプロトタイプであり，そこから時間的・概念的用法が派生するという認知

---

[1] 言語間対照としては，itif と ventif の多様性と共通性についての Bourdin の一連の研究，Forest の共感度 empathie の観点からの論，Celle，Lansari の英仏比較などがある．

言語学で行われる「拡張」分析ではなく，抽象的レベルにある基本スキーマから柔軟多様な意味が生じる道が開かれるという考え方を追求することになる．例外的で特殊と見える意味・統語現象や固定した成句表現とおぼしきものも，この原則からそれぞれのマーカーの本質と密かに結びついていることを明らかにすることを目指す．

1. 主体，ポジション（p, p’,（p, p’）），

考察するにあたって導きの糸となるのは次の考え方である．言語が持つ限定作用は＜主体＞が選択する値 p，排除する値 p’，値選択の分岐点（p, p’）の三つのポジションによって規定され[2]，発話文に現れる言語マーカーの意味はその可塑的 ＜主体ポジション配置＞ と主体の動的移行が作るバリエーション配置として捉えられる．以下では，ここで問題にする aller と venir が取る＜基本のポジション配置＞から出発し，発話文の解釈と制約をできる限り網羅的に検討することで＜ポジション配置＞のバリエーション，基本構図との関係を明らかにすることになる．

＜主体＞となるのは，主に S（話者），S’（共話者），X（移動項）だが[3]，必要に応じて他の＜主体＞も導入する．S と S’ は経験的な生身の「話し手」,「聞き手」ではなく，S’ は S によって構築され，＜ポジション＞同化や異化が可能な理論的構成体になる．X は文主語で，対象となる aller, venir については「起点」から「着点」への空間移動の主体と取りあえずはしておくが，より一般的な特徴づけについては後述する．

p / p’ は，注 2 で述べたように，論理学的な「肯定（真）」/「否定（偽）」の

---

[2] ここで言う＜値＞とは，主体による対象の＜存在（出現）＞（ある）や＜評価＞（よい）の判断を意味する．すなわち，選択される値 <p> は，＜存在＞に関わる時空間での「ある／ない」ばかりでなく，＜評価＞すなわち「どのようにある」か（事態が好ましい／好ましくない，名称にふさわしい／ふさわしくない）という側面をもつこともあるということになる．排除される値 <p’> は，時空間での不在（ない）と評価との不一致（好ましくないなど）が含まれる．（p，p’）は p へも p’ へもアクセス可能な値を示す．

[3] X は必ずしも「人間」ではない．*Ça* va. *Ce costume* te va bien. *La sagesse* vient avec l’âge. *L’idée* me vient à l’esprit. …

ペアではなく，＜主体＞が発話空間に獲得する存在・性質の＜値＞で，発話文の観察が導く理論的構成体になる．例えば，p が実現されたり文脈から推測されたりするが＜主体＞はむしろ p' を望ましいとする，現実には（p, p'）だが p が志向される，取りあえず選択した p をあらためて（p, p'）から確認する，（p, p'）からではなく唐突に想定外の p が実現する，p を想定していたが予想外に p' になったなど，様々な＜ポジション＞取りが複数の主体の間で考えられる．＜ポジション＞は異なる＜主体＞間でずれたり重なったりするばかりでなく，同一＜主体＞内でさえ移動が排除されない．

aller（行ク，go ...）/ venir（来ル，come ...）については，ダイクシス（「私・ここ・今」との関係づけ）の観点から既に多くの先行研究がある．まず最初に最低限の共通理解を確認しておこう．aller の S（話者）視点は起点にあり，着点に対して遠心的，逆に求心的な venir は着点に S（話者）視点がある点に特徴がある[4]．この関係を取りあえず次の図式にまとめておく．

X（p）　X（p'）
↖　（↗）
X（p, p'）［S］
［図 1 ：aller］

X（p）［S］　~~X（p'）［S］~~
↘↖　x↗
X（p, p'）
［図 2 ：venir］

この図の意味するところは次の通りである．aller における話者 S の＜ポジション＞は移動項 X の起点（移動の手前）にあり，着点 p を志向するが未着を排除しないので p' への道も消極的には開かれている（カッコ（↗）で示す）．venir では着点に S の＜ポジション＞が置かれ，起点は着点から遡行的に与えられるのみである．いずれにせよハイライトされるのは着点で，de による起点

[4] 正確に言えば，aller は venir と異なり，起点への視点をもたない中立的視点からの移動（aller de A à B）の場合があり，ダイクシスに関する無標性がある．逆に venir は S へ向かう方向性に関しては有標で中立的にはならない．また，相手の場へ赴く Je viens tout de suite（I'm coming now）のような発話では，聞き手に対して求心的になる．しかし，本稿の解釈では，この場合も S が S' と同化し，値 p の担い手は最終的に S になると考える．

表示は必須要素ではなく，S にとっては p' への道は積極的に閉ざされている（$_{x}$↗と字消し線で示す）[5]．話者位置がそれぞれ起点，着点にあることは直観的にも特に問題はないだろう．問題は，ここから時間的・概念的用法の広がりがどのように説明できるかというその道筋にある．

もう一つ注目しておきたい点は，視点が置かれ＜前景化＞する太字部分の値［図１］の（**p, p'**），［図２］の **p** は，S と X の＜ポジション＞だが，移動当事者の X には＜背景＞となるその他の＜ポジション＞が同時に存在している．これら＜背景＞の値がどのような文解釈をあたえるかを＜前景＞とともに注釈していくことが動詞の総合的理解を助けると考える．以下，２節で aller，３節で venir について細かく検討していく．

2. aller

2.1 y aller と s'en aller

フランス語では，着点，起点を何らかのかたちで含まない *Je vais ø. は排除され，J'y vais（目的地へ行く）または Je m'en vais（現在地を離れる）が移動の基本形となる．換言すれば，移動そのものではなく，着点（y）や起点（en）がかたちと意味（p,（p, p'））に含まれる[6]．日本語の「行く」は，目的地や出発地が省略されたまま「（そこへ）行く」,「立ち去る」の両義性を持つが，表現内容の点ではフランス語と変わりはない．着点を示さず様態の副詞のみ伴う「行く（＝進む）」，aller {vite / à grands pas / à reculons / bon train / au galop … } については，ここでは扱わない[7]．

---

[5] 着か未着かは動詞の時制形（過去，未来 …）の観点ではなく，動詞の語彙的意味に依存する．時間軸上で過去形（il est venu）では着，未来形（Il viendra）では未着というのは別のパラメータの問題である．また否定文の場合は［図１］が（↖）↗，［図２］が ↖$_{x}$ ↙↗ となる．否定文には肯定文にない制約が働いたり特殊な意味効果が生じることもあり，その場合は現象ごとに論じる．

[6] 着点には様々な前置詞表現（à，chez，sur，dans，en，…）が使われる．また s'en aller がなぜ代名動詞になるかについても考察が必要だが，ここではふれない．cf. s'envoler，s'endormir，…

[7] しかし，行き方が問題になっている場合でも，『白水社ラルース仏和辞典』の記述にあるように，{Je / J'y} vais avec vous のように，単に着点が省略されている（復元される）とも考えられる．例．{Je / J'y} vais à pied，/ On {va / y va} plus vite en métro

以下のような aller の用法も空間移動と相似するとみなせる．移動主体 X は，メトニミー（隣接性の関係構築）[8] によって X（= 人）の活動やその手段，活動時間，感情，所有物などに結びつき，流れる時間の終点，感情の対象，所有者なども着点とみなすことができる．

（1） a. Cette route va à Strasbourg.（ロワイヤル仏和小辞典）
b. La période de fermeture va jusqu'au 2 mars.（id.）
c. Sa haine allait à son père.（id.）
d. L'héritage est allé à sa fille.（id.）
e. Les draps vont dans le placard.（id.）

「道路」の移動（cette route va …）は実は道路利用者の移動であり（1 a），「（店の）閉鎖」は商業活動の時間軸上の移動（1 b）に他ならない．「憎しみの感情」（1 c），「遺産」（1 d），「シーツ」（1 e）も，関与する主体がなければ移動することはない[9]．

さらに着点が活動となる場合について見ておく．（2 a）の着点は場所や人であるだけでなく，商業活動，治療活動などを目的（着点）としている．（2 b）では明らかな活動名詞（「狩り」，「ミサ」，「散歩」，「旅行」）が X の移動目的（着点）となる．

（2） a. aller chez le boulanger（à la boulangerie), chez le médecin, … /

---

qu'en voiture.

[8] 佐藤信夫『レトリック感覚』と瀬戸賢一『認識のレトリック』の解釈に従い，メトニミー（換喩）は「全体・部分」の指示対象の現実的関係に基づく転義とする．例：「赤ずきん」（→ 少女の部分）．「類・種」の意味的階層関係に基づくシネクドキ（提喩）とは区別する．例：小町（→ 美人の一種）．

[9] （1 a-e.）は次のパラフーズが可能だろう．（1 a'）On va à Strasbourg sur cette route,（1 b'）On ferme（le magasin）jusqu'au 2 mars,（1 c'）Il / Elle haït son père,（1 d'）On laisse un héritage à sa fille,（1 e'）On range les draps dans le placard. 人とその活動に結びついた「手段」や「結果」（X）が近接性（contiguïté）の関係（メトニミー）を通して，動因としての主体になっていることが見てとれる．

b. aller à la chasse（aux champignons）, à la messe, en promenade, en voyage, ...

ここまでの例は，X が着点，すなわち場所，時間，目的を志向する広い意味での移動の一種と捉えることができる．基本的には話者 S が移動の主体 X に寄り添い，起点に位置し着点を目指す．

2.2 ça va

一見したところ着点をもたず，状態を表す ça va. はどう捉えたらよいか．「調子がよい」を意味するこの表現は，主体に関わりのある身体や主体を囲む物事や状況 X（ça）が「うまくいく」という評価的値 p を志向している．反対表現 ça va mal（ça va pas bien）があることからもわかるように，「良い（p），悪い（p'）」の分岐点からの選択がある．このような場合，S が積極的に p を選択している（移動用法の場合，着点 p を志向するのは S ではなく X であった）．この関係を［図 1 a］で示そう[10]．

X（p）［**S**］　　X（p'）
　↖　　（↗）
　X（p, p'）［S］　　［図 1 a］

［図 1］では S のポジションは（p, p'）に置かれたが，［図 1 a］では S も X（p）のポジションを取る．ただし，S は［図 1 a］で＜分岐点＞にも軸足を残している．ça va は p を想定しながらの中立的な質問文 ça va ? になるし，下例（3）「まあまあ」（4）「もういい（からやめろ）」では逆に X（p'）［S］がはっきりと観察できる．aller の図式には，X（p, p'）に S の基本ポジションがあるという仮説は保存した上で，**p**,（p, p'）あるいは p,（**p, p'**）の間に比重のかけ方（太字）のバリエーションがあると考えたい．以下では，空間移動の着点，起点をより一般的な＜値＞（p あるいは p'），＜分岐点＞（p, p'）と呼ぶ．

[10] 否定文の場合は，［図 1'］で X（p'）［S］と示すことができる．

（3） - Ça va ?
- Oh, ça va comme ci comme ça.

＜分岐点＞を介しての複合的判断は，決して万全な調子でないときの発話（3）（まあね，何とか…）に見いだすことができる．S は p と言っているが，実は p' への道は閉じてはいない．p を最終的には選択するが，ためらいながら p' への道を念頭に置いているというニュアンスが伝わる[11]．＜分岐点＞から p' への経路は閉ざされず，p が選択された後も消極的に残っている（カッコ付きの（↗）表示）という解釈になる．

さらに会話では，相手に対して苛立ち，なだめすかす次のような ça va の使い方（もうたくさんだ，やめてくれ）もある．

（4） Oh, ça va comme ça, arrête donc.

comme ça に対応する相手 S' の態度は S にとって好ましいものではなく，（4）はそんな態度を改めるべく発話される．X = S'（p）（あなたのここまでの態度：ça）を確認，妥協しながらも，同時に **→ X（p'）[S]** という判断（私はその態度をもうやめるべきだと思う：ça suffit）が込められている．このような二重性は，S が S' への違和を持ち分岐点（p, p'）を共有してそこから説得しようとするからこそ可能となる[12]．［図 1 b］では，事実としての p を後景化し，期待値 X（p'）[S] が構築される．

---

[11] 「うまくいった」というときに，複合過去形で *C'est allé が使えない（正しくは，Ça a été）のも，aller には p の選択だけでなく（p, p'）に S の軸足が残っていることに由来すると思われる．これは，「行ってきた」，「行った経験がある」が Il a été en France で，Il est allé en France が「行ってしまって今いない」の意味になる傾向が強いのと平行した現象だと考えられる．S の「今・ここ」にいないことが aller にとっての本来的な用法で，S と X（p）との強い関係は避けられている．

[12] 共話者 S' は S と必ずしも対立するわけではなく，同じポジションを取る調和的主体になることもある．違和感と説得の動的プロセスはこのような文脈で考えられる．さらに言えば，S と S' が融合して別の公共的な話者（S_x）とでも呼ぶことができる存在になることもある（後述 3.4.3 節参照）．

X（p）　**X（p’）[S]**

↘　↗

X（p, p’）[S]　　［図 1 b］

2.3 X me（te, ...）va bien.

モノ・コト主語に人称間接目的語（à + 人）を伴う aller がある．次の「似合う」「都合がいい」のタイプの aller では，ça va の場合の評価主体 S がここでも出現している．

（5） a. Cette robe te va bien.
b. Est-ce que le 5 vous va pour notre réunion ?（ロワイヤル仏和小）

（5 a/b）では間接目的語 te, notre réunion など主体とメトニミーの関係（君の身体，私たちの会議）で結ばれる値 p にとって X（服や日程）がふさわしいかどうかという理解となる．ふさわしくなければ，bien の代わりに mal，動詞肯定形の代わりに否定形の選択肢がある．空間移動では X（p）は，「X（人）が p（場所）へ移動する」であったが，この用法では「X（モノ，時）が p（人の身体，都合，...）に向かう）」とパラフレーズされよう[13]．1.2 節で取りあげた ça va / ça ne va pas と基本的には同型だが，ça が X（モノ，時，...），p が（me, te, ...）とより具体的に展開される．X（p）は評価者（S：肯定・否定文 , S’：疑問文］をもつ[14]．

（5） c. Ce film ne me va pas.（ロワイヤル仏和小）
d. Ça lui va {mal / bien} de critiquer les autres.（小学館仏和大）

---

[13] モノが人に向かうこのような「反転」現象は，J’aime X ⇄ X me plaît. J’ai X ⇄ X est à moi など，フランス語ではよく観察される．

[14]「合う」意味の aller はヒト（ça *me* va）だけでなくモノが値となることもある．例．Cette clef *ne va pas* à la serrure（小学館大）．Ce canapé *ira* bien dans la chambre（ロワイヤル小）．Le vin blanc *va* bien avec le poisson（Le Dico）．この場合も評価主体 S, S’ が当然想定される．

さらにX（ne）va（pas）à qqn. 構文の日本語訳は，（5c / d）では「この映画は私の好みではない」,「他人を批判するのは彼らしくない（彼の柄ではない）/ 彼らしい（彼のしそうなことだ）」と大幅に変わる．移動対象Xが向かう「人」のメトニミックな値pは「外見」「都合」「好み」「人柄」など多次元に渡っている．

2.4 間投詞

一見マージナルな現象であるallerの命令形を利用した間投詞用法にも注目しておこう．間投詞用法は様々なニュアンスを作るが，いずれも相手への促しがあることがまず観察される．S'（あるいはS' & S = nous）は事実の上では分岐点に位置しているが，SはS'（あるいはS & S'）をp（目標）へと鼓舞するわけである．鼓舞，激励は未然の事態の先取り的評価で，［図1a］の構図が適応する．しかし，評価にも実は様々なニュアンスがつきまとう[15].

（6） a. Allez, au revoir ! / Allons au travail !
b. Allez, ne t'en fais pas ! Ça va s'arranger !（ロワイヤル仏和小）
c. Allons, allons, ne dis pas n'importe quoi !（白水社ラルース）

注意する必要があるのは，（6）には共通して現状p'の確認から出発しSは分岐点へと立ち戻るようにS'を説得し，S'（p）を目指す点である．しかし，SとS'の態度が一致しない可能性もある．（6b）では相手が「心配している（p'）」様子を見てなだめ，（6c）は相手が「いいかげんなことを言っている（p'）」のに苛立ち，非難を加えている．（6a）はここまでのS, S'の共有していた状況に区切りをつけ（p'），新たな状況（p）へとS'を誘う（いっしょにいる → 別れる，休息 → 仕事）．ということは，分岐点にいるSはS'が惰性的にp'に留まり続ける可能性を憂慮していることになる．（6）はいずれもS'（p'）の確認に

[15] Allez les bleus ! は，勝利へ向かっての励まし（頑張れ！）なので，選手（S'）もサポーター（S）も同じ方向（p）を向いていると考えられる．（6a-c）にも観察できるように，va ! allez ! allons ! の人称選択（2人称単数親称，2人称単数遠称・複数，1人称複数）は必ずしも行為者Xのそれと一致しているわけではない．

出発点がある．S はその態度や状況を改めようと積極的に働きかける．従って，X（ça）を S' と置き換えれば ça va と同様のバリエーションが観察される．

aller の 3 種類の命令形（va, allez, allons）からなる間投詞は，場合によっては同じ文脈で交代可能なことがある（注15参照）が，文中の位置や他のマーカーとの組み合わせによって，人称レベルの区別とは異なる制約があるようだ[16]．ここで詳細に論じる余裕はないが，特に va ! は文末に置かれると相手との対立が際立ち，非難や嘲笑の意味が付加される．

（7） a. Vante-toi, va !（Tavernier, *Un dimanche à la campagne*）
b. Je ne suis pas si bête, va !（Pialat, *Sous le soleil de Satan*）

（7）は映画シナリオからの引用例で[17]，「せいぜい自慢したらいいわ」（7 a），「あたしってそんなにお馬鹿さんじゃないわよ」（7 b）ということで，出発点にある S' の言動に対しての疑いと見直しが重要となる．前者は文字通りの意味（p：自慢しろ）ではなく反語であり，後者は相手の発言（p：「あなたは馬鹿だ」）への反論を va ! が支えているので，これらも［図 1 b］に還元して理解できるだろう．

次の（8）も donc との組み合わせで皮肉（どうぞご勝手に），疑い（どうでしょうかねぇ）など相手への違和感が表明される[18]．

（8） a. Et *allez donc* ! Ne vous gênez pas !（小学館大）
（ほらどうした．気にしないでやれよ．）

---

[16] 以下で取りあげる組み合わせ以外に，落胆の表現 allons bon !（ex. Elle est encore malade. Allons bon（やれやれ），elle va m'empêcher de partir. 白水社ラルース），nous, vous, tu に対して状況を転換するように行為を促すと思われる allez va ! の組み合わせ（Allez va, prépare-toi ! / Allez va, nous parlerons plus tard. Allez va, revenez demain !, Soriano : 76）や allez, allez ! allons, allons ! の畳語もある．それぞれの制約や意味についてはさらなる検討の余地がある．

[17] 窪川英水『映画にみるフランス口語表現辞典』，pp 386-387.

[18] ここでも va は特異な振る舞いを見せ，Va donc,（eh）… は俗語で罵りの表現になる．例．*Va donc*, eh chauffard !（Goscinny, *Le petit Nicolas et les copains*, 窪川前掲書）

b. Tu ne savais pas qu'on avait une réunion ? *Allons donc*, on ne te crois pas.（白水社ラルース）
（会議があるのを知らなかったって？そんなことを言っても騙されないよ.）

ここでは発話マーカー donc について簡単に考察し，なぜ aller との連鎖が相手を突き放したような不信の効果を出すのかを示す[19]．donc は，donc p に先行する x（文脈に明示化されないこともある）を p から再構成することができる．すなわち，すべて "x, donc p" の構造になっていると考えられる．（A）取り直し（reprise）による言い換え，（B）推論の結果あるいは原因の提示，（C）疑問文，命令文，感嘆文などの文脈で驚きや強意を示すが，いずれも donc に反復あるいは同一化の操作を見てとることができる．

ここでの donc は，かたち（allez / allons donc）から考えて（C）の命令文の場合にあたるのは当然だろう．命令文 ＋ donc は，先行文脈での行動指令（p, p'）→ p があったにもかかわらず逡巡し（p, p'）へ留まる相手への催促「さあさあ，ぐずぐずしないで（遠慮しないで）～しなさい！」で，例えば，Taisez-vous *donc*！（黙りなさいよ）では，なかなか静かにしようとしない相手への督促ということになる．

問題の間投詞用法はどうだろうか？先行文脈に構築されているのは，S の先

---

[19] 以下の donc についての分析は，Culioli（1989 /1991）による．まず（A）-（C）の例を示そう．（A）［取り直し］Tu dis *donc* que ce n'est pas de ta faute ? / Je te disais *donc* que ...（B）［推論］Il a plu ; la terrasse est *donc* mouillée.（原因）/ La terrasse est mouillée ; il a *donc* plu.（結果）（C）［疑問文］Qui *donc* est venu me voir ?［命令文］Entre *donc* !［感嘆文］Que tu es *donc* beau !（B）は因果関係の結果（時間的後）が原因に，あるいは原因（時間的前）が結果に同一化され，x - p が切り離せない結びつきをなす．周知のように，論理学では x → p の関係で p が与えられた場合必ずしも x ではないが，自然言語の推論としては x と p が同一化される傾向があり，p → x が成立する．この意味で，（A）と同様に（B）の推論にも継起関係と同一化関係が構築される．（C）［疑問］は，値が得られず，苛立ちや自問自答のかたちによる疑問の反復（一体全体 ... ？）がある：（p, p'）→（p, p'）．［命令］は，前構築（p, p'）を受け p が念押しとして選択され，［感嘆］は，当該事例 p_i が「一応 p（= p'）」ではなく，「真の p（= p）」（高い程度）であるというステータスを獲得する．いずれも donc の再確認，同一化の運動を見ることができる．

行命令ではなくS' 自身が選択した値 p（8 a：S' の無遠慮な言動），（8 b）：S' の発言「知らなかった」）である点が違っている．つまり，donc によってSはS'（p）に同調するふりをしつつ，aller の基本スキーマである分岐点からの見直し（カッコつきの → p'）を図るという「皮肉」の構図になるわけだ．このような前景・背景を反転させたような主体間関係は，「そう言うのはあなただ（私ではない）」（= あなたはそう言うが，私には合点がいかない）と相手に発言を帰すフランス語の慣用表現 C'est vous qui le dites を思い出させる．

まとめると，aller の間投詞用法には「激励」の構図 S'（p, p'）→ **S'（p）[S]** がその基底にあるのは明らかだが，S と S' のポジションをそれぞれ想定し，力点の変更を加えれば（1）S'（p, p'）→ **S'（p）**，（2）**S'（p, p'）** → S'（p），（3）S（p, p'）→ **S（p）**，（4）**S（p, p'）** → S（p）が理論的に想定し，S と S' の一致とずれのバリエーションによって多様なニュアンスが伝えられる．（1）（3）の調和的組み合わせはわかりやすい「激励」解釈となり，（1）（4）の不調和な組み合わせは「皮肉」「冷笑」，（2）（3）によって「なだめ」「苛立ち」が理解される[20]．

2.5 aller + inf

最後に，aller + 動詞不定法構文を次の3つのタイプに大別し検討する．

（9） Il *va* faire les courses.［〜しに行く：移動と目的］

（10） a. Il *va* partir.［〜する：近接未来（発話時基準）］

b. J'*allais* sortir, quand ....［〜するところだった：近接未来（過去時基準）］

（11） Et cet imbécile, il *est allé* se rappeler ce que je lui avait promis.
（Bres & Labeau, 2013（b））［異常なふるまい］
（あのバカ，僕が約束したことを思い出しやがって ... ！）

[20] aller loin，aller fort など「行き過ぎ」を表す表現も（1）（4）の組み合わせで考えられる．

（9）の「移動目的」用法は，aller + 場所（着点）の用法と大きく異なることはない．「着点」は「目標」と読み替えられ，aller の動詞パラダイムも過去，現在，未来のあらゆるかたちが可能だ．

2.5.1節では，(10) の「近未来」用法を扱う．未来（前望）での事行成立を表すが，特記すべきは aller の変化は基準時に限定され，現在形（発話時基準）または半過去形（過去時基準）しか現れないという点である．多くの研究が指摘するように，この用法は近い未来を客観的または主観的に測定して発話されるわけではない．そうではなく，発話状況での獲得情報に基づき予想される事行を発話時との「連続性」の中に位置づけると考えられる．その意味で，同じく未来（前望）表現で発話時との「断絶」をマークする単純未来形とは出現文脈や意味が異なり，(11) の否定評価の aller + inf の問題にも繋がっていると考えられる．

(11) のタイプの否定評価を含意するモーダルな用法は，Damourette-Pichon を嚆矢とする allure extraordinaire という命名（慣例に従って「異常なふるまい」という訳をあてる）に由来し，「近未来」の aller と違って時制の制約を受けない．モーダルな aller + inf は，他にも主語の「特徴的ふるまい」用法，語りの文脈での出現，on va dire の「婉曲」用法もあり，これらは何らかの否定モダリティーによって連続していると思われる．2.5.2節で，S (p, p') の前景化，(p, p') → p' の解釈可能性と関連させまとめて論じる．

2.5.1「近未来」の制約

2.5.1.1 aller + inf *vs.* fs（単純未来）

aller + inf を発話基準時 T から見た「未来」の事態が t 時で成立すると考えれば T（p, p'）→ t（p）と表記され，空間移動の場合と平行して理解できる．すなわち，基準時 T では成立する可能性（p, p'）があるに過ぎないと定義される事態が，時間が経過し t 時に移行したときは実際成立すると S が考えていることが表現される．判断する主体 S（視点）は時間軸上の基準時に位置するので，aller はフランス語時制の中で基準時を示すことができる現在形（pr），または半過去形（imp）にしかならないのである．

その意味で，近未来の aller + inf の特徴づけには pr と imp の基本的性質を

取り入れておく必然性がある．同じことは後に検討する pr / imp のみを許容する venir de + inf についても言える．pr / imp は基本的に未完了アスペクトであり，開始事行の終点は注目されない．X を事行とすれば，［図 1 a］によって特に障害がない限り S は状況にある根拠（a）をもとに X（p, p'）［S］→ X（**p**）/ **a**［**S**］の成立を断定するが[21]，p' への道が閉鎖されているわけではない．以下，文脈なしでは区別がつきにくい aller + inf / 単純未来（fs）の文脈化を試みている研究から 3 つの事例を紹介する．

（12） aller + inf *vs.* fs の文脈化（1），Pauly（2009 : 62-63）

a. A : On est à Odéon. Tu descends là tu m'a dit.

B : Non ; finalement je *vais descendre* à la prochaine ; c'est plus pratique.

b. Zut ! J'ai raté la station Odéon … Tant pis, je *descendrai* à la prochaine.

（13） aller + inf *vs.* fs の文脈化（2），Pauly（2009 : 63-64）

a. On *va rire*, demain, à l'anniversaire de Martine, si tu débarques dans cette tenue !

b. On *rira* demain. A l'anniversaire de Martine. Pour le moment, il faut travailler !

（14） aller + inf *vs.* fs の文脈化（3），Forest（1999 : 64）

（墜落する飛行機内での会話）

A : Nous *allons* tous *mourir* !（このままじゃあ，全員死んでしまう）

B : Eh bien, nous *mourrons* tous.（そう，皆死ぬんですよ）

---

[21] この考え方は，Damourette-Pichon，Franckel，Confais，Schrott，Larreya などに見ることができる．根拠 a を担保するのは S であり，S / S' の間で必ずしも共有されない．例えば，ロメールの映画 *Le beau mariage*（1982）で，思い込みの激しい女主人公 Sabine はまだ相手も決まらないのに Je vais me marier（私，結婚するの）と発言する．この断言が自ずと Avec qui ? という問を惹起するのは，「結婚」の根拠を相手が知りたいと思うからである（Franckel，1984 : 69）．

（12）は，a. オデオン駅で下車する予定のBが，よく考えてみると（finalement）次の駅の方が便利だから「次で降りる」という場合（aller + inf），b. オデオン駅で降りそこなったBが仕方なく「次で降りる」（fs）という場合の対比で，いずれも競合形に転換することはむずかしい（a : ? fs / b : ? aller + inf）．aller + inf を使った（12a）「次の駅で降りる（p）」は，「オデオン駅で降りる（p'）」をBが考慮したが結局は排除しpを選択した結果の発話である．Sにとってp'が選択肢として発話時に比較検討の対象となっている．一方fsによるb. は思いがけず乗り過ごしてしまったBが「オデオン駅で降りる（p'）」がもはや叶わないので仕方なくp（次の駅で降りる）を選択している．つまり，発話時でp'は排除され考慮の対象外になっている．換言すれば，aller + inf はSにとってp'と**p**が（p, p'）を媒介として＜連続＞しているが，fsでは完全に切り離され＜断絶＞している．aller + inf もfsもaltérité（他性：pに対するp'）が介在するが，その発話条件は異なっているということになる．付け加えれば，現在形 je descends には，積極的な他性の構築はない（cf.（12a）A : Tu descends ...）

（13）では，「マルチーヌの誕生パーティを楽しむ明日」と「勉強しなければならない今」が分け隔てられる（13b）のfsに対し，（13a）のaller + infでは「おかしな仮装の試着をする今」は「明日のパーティの楽しみ」が目標として設定され，今の延長線上に明日がある．

話者の事態に対する「共感（empathie）」という概念を援用して多くの言語現象を分析したForest（1999）は，一般論として，Sの共感性と親和しやすいvenirと逆にallerには「共感の妨げ（empathie contrariée）」が働きやすいと主張する[22]．（14）では，確実に飛行機が墜落するという状況の中でaller + infを用いるAは，いわば客観的に「乗客全員の死」を予測しているように思える．

---

[22]「共感」をわかりやすい例で言えば，英語のgo {mad, bankrupt, to pieces} などはSの共感を妨げる悪い変化を表すが，come {true, to life, ...} などはSが共感する良い変化を表すという現象が挙げられる．同じく，The patients temperature went {up / down} は患者が平熱から離れて（上昇または下降）容態が悪化，The patients temperature came {up / down} は熱が上昇または下降して平熱に近づき患者は回復する．（出原（2009），「go と『行く』－志向性の観点から」，『彦根論叢』378）

その意味では fs を用いる B と同じく確実な根拠に基づく発話をしていると言える．違いを解釈すれば，A の場合には「共感の妨げ」があり，恐怖心は確実な未来（p）に対して心的抵抗（p'）を表出していると言えるのではないだろうか．逆に B はある種の諦念の中で確実な未来を引き受ける．Forest は後者を「危機に動じない態度」と注釈している．

2.5.1.2 主体の複数性：S vs. S'

近未来の aller ＋ inf は［図 1 a］で示した S のポジション移動で理解できるが，（p, p'）→ **p** の分岐点は選択されなかった p' への道が潜在的あるいは顕在的に開かれていると主張したい．同じく p が選択される単純未来形は，p' への道を積極的に閉ざした（p, p'）$_x$ → p' 結果としての p の選択（主観的決意，客観的必然性）なのである．しかし，誰にとっての可能性，選択，排除なのか．このことを理解するには，主体の単一性と複数性のパラメータを導入する必要がある．

fs と aller + inf それぞれの本質的機能について精緻な議論を展開している渡邊（2014）は aller + inf を「直線的時間のなかで，ある事行の実現にむけて漸進しつつある準備段階が発話時点に位置づけられること」に本質があるとしている．渡邊も述べているように，aller + inf / fs の差異は事行成立時 t と発話時 T との < 連続 / 断絶 > をキーワードとするが[23]，前者における（p, p'）→ p の「連続」は，p の起源が（p, p'）にあることに他ならない（まだ p ではない，いずれ p になる「可能性」が保たれている）．その意味では，S にとっては p に漸進的に向かいつつあるが，異なる主体の観点から（p, p'）→ p' へ向かう可能性が常にあるのである．渡邊は aller + inf が「可能世界への分岐をもたない直線的時間への位置づけ」が行われるとするが，誰が位置づけるかという主体のパラメータを考慮すれば，前景化するかどうかは別にして，aller ＋ inf の背後に「分岐」はあると言うべきである．

---

[23] T との < 連続 / 断絶 > は，Franckel（1984）が指摘するように，fs では時の副詞は一次的に事行を定位するが（事行成立時は時の副詞に全面的に依存），aller + inf では既に T = 発話基準があるので時の副詞は二次的なものに過ぎないという違いを作る．

fs に関しては，渡邊も記しているように視点は事行成立時 t にある．このことは，＜断絶＞している t（S）を T（S）と事後的にリンクさせる可能性を排除するものではないが，t（S）にとって p / p' の対立は奪われている．厳密に言えば，T（S）の S は S' と相補的で潜在的に S / S' が対立しているが，t（S）の S は S' を召喚しないので同一 S とは言えない．上例（12b）は降りたい駅で降りそこない仕方なく，（13b）は明日の楽しみを今の関心から追い出し，（14B）はストイックな意志表明によって，いずれも S によって p' が排除され，p' を可能性の対象とするような他の主体は考えられない．他方 aller ＋ inf の場合，（12a）では自問自答，（13a）は si 節の条件付け[24]，（14A）は主体の恐怖によって p' が考慮される．ここで立ち現れる p' を担う主体は，現実的には p を担う主体と同一人物だが，言語構築の主体としては自己対話の対話相手（S'）であり同一人物の異なる観点を表している．

以上，S（p）が S'（p'）を消極的に含むと思われる aller ＋ inf の用法を見た．次の2.5.2節では，S（p）が S'（p'）を積極的に含むと思われるモダリティ用法について検討する．

2.5.2 aller + inf とモダリティ

2.5.2.1 否定評価

マイナス評価を含む aller + inf を allure extraordinaire（異常なふるまい）を表す用法と命名した Dmourette-Pichon（1652節）は “le verbe *aller* confère au verbe dont l'infinitif le suit un caractère dérangeant par rapport à l'ordre attendu des choses ”（aller は不定法動詞に対して，予期されるものごとの秩序

[24] si 節はこの文脈では，純粋な仮定というよりは，avec cette tenue，… すなわち発話時に存在する要素を状況補語として取り直している．また tu débarques … も不定の 2 人称で on débarque … に近く，発話状況にいる je の加担がある．Franckel（1984）は，si 節 + 主節（fs）は T 時に存在しない仮定（si par hasard）を表すが，（13a）タイプの si 節 + 主節（aller + inf）は T 時にある事態を確認すると論じている．例．S'il est là（= S'il est vrai que /S'il se confirme que / Puisque），on ne *va* pas *s'amuser*. Franckel の提示するこの例は，S'il est là（= Si par hasard / Si jamais il est là），on ne *s'amusera* pas と違い，前者（si + alller inf）にある S / S' の対立が後者では融合し区別がなくなっている．

を乱す性格を付与する）と定義している．extraordinaire（異常）は ordinaire（普通）ではないという意味であろう．

Larreya（2005 : 350-354）はこの用法には評価対象に a. 既然（constatif）と b. 未然（non constatif）の両者があるとする．a. の例としては，例えば前出の（11）Et cet imbécile, il *est allé* se rappeler ce que je lui avait promis.（あのバカ，僕が約束したことを思い出しやがって … ！）や，同じく複合過去形の（15）が該当する．Larreya（id : 352）は（15）のパラフレーズとして（15a）（15b）を提示している．

（15） Oui, une voiture toute neuve. Et ce connard est allé m'emboutir une aile.
（[渡邊（2014）訳 : 151]）そうだよ，まっさらの新車だよ．それを，あの莫迦はフェンダーをへこませてくれちゃったのさ）

（15a） （…）*Il a fallu qu'*il m'emboutisse une aile.

（15b） （…）*Il a trouvé le moyen de* m'emboutir une aile.

（15a/b）の解釈は，当該事行が動作主 X の恣意（責任）により成立し，S は皮肉を込めて「よりによって～する」「まんまと～する」と否定的な評価をくだすということになる．これは aller + inf の話者 S による p の確認と p' の評価が分離，対立していることを示す．aller + inf を取り除き，（15'）Et ce connard m'a embouti une aile としても文内容から非難の意は読み取れるが，aller + inf は規範意識（ordinaire）の逸脱を S が積極的に判断していることになる．この解釈は先に2.2 節で ça va（もうたくさんだ，やめてくれ）のときに定式化した［図 1 b］が該当し，出発点には S による p の実現（il a embouti une aile）があり，確認主体 S に対して評価主体 S が際立つ．

「異常な振る舞い」の二番目の場合（inf が表す事行が未然）はどうなるか．未然であることから「近未来」とするのでは不十分だろう．やはり当該事行に対して S が否定評価を与えていることが注目される．この場合多くは対話相手（S'）の意向を忖度しての警告となり，認識・発言タイプの動詞（penser, croire, dire, … ）の否定命令または否定志向の修辞疑問が目につく．

（16） *N'allez pas croire* que j'y suis allé par plaisir.（Larreya, id : 351）

（17） （ケベックでのイスラム女性のベール着用についての議論）*Allez*-vous *croire* que le fait d'avoir des femmes qui portent un voile *va* nous *replonger* à cette époque ? C'est totalement ridicule !（internet）

（18） Ne t'inquiète pas. Je *ne vais pas* te *manger*.（白水社ラルース）

（19） （ギリシャのユーロ圏からの分離を主張する議員の発言）*Allez expliquer* aux agriculteurs qu'il faudra encore payer pour la Grèce.（Libération / Internet）

（20） A : Fais attention, tu va la casser !
B : Mais non ! Je *ne vais pas* la *casser* !（Franckel, id : 68）

（16）-（19）には相手の思考の先取りがあり，（20）には相手の言の取り直しがある．「（間違って）～と思ったり言ったりしないように」と注意を喚起するわけである．Franckel は aller の否定形が，p' の選択と同時に必ず p の選択を含意する点で，aller 肯定形 + inf と非対称的であると述べている[25]．（16）（18）（20）は否定形，（17）は反語疑問文で主節，que 節の aller + inf がいずれも否定を含意する．（18）では相手の怯えた様子を読み取った S が S' の p : X me mange を構築するが，（20）では A の発言中に p（tu la casses）がある．（19）は反語的な肯定命令で，「説明してみろ（無理にきまっている）」と解釈され，虚構的に p : vous expliquez［S'］を演出していることになる．同類の表現として allez savoir, allez comprendre ... ! を挙げておく[26]．

結局，inf の事行成立が未然（non constatif）の場合も，X（p）あるいは X（p'）を S' に帰し，さらに当該 p あるいは p' に S のマイナス評価を付与すれば同じスキーマ［図 1 b］として理解することができる．

---

[25] fs には p / p' の対称性（一方の選択は他方を排除）があることも Franckel は述べている．逆に，aller + inf では，（1）否定 p' の選択が何らかのかたちで肯定内容 p を文脈に導入し，S は p の存在を認知するので断固たる拒否には不適切：Quoi qu'il arrive, {je n'irai pas / *je ne vais pas y aller}，（2）p（肯定形）の選択が必ずしも p' の存在を含意しないが，含意することもあるので，肯定・否定の関係は非対称的になる．

[26] オックスフォード仏英辞典の用例：*Va*（*donc*）*savoir* ce qui s'est passé.（Who knows what happened ?）*Allez* y *comprendre* quelque chose !（Just try and work that out!）

2.5.2.2 特徴付け，語り，婉曲

aller + inf が未来の事行というより，叙述内容に対する S のネガティブな態度表明（モダリティ）とみなせる三つの用法をさらに取りあげ，簡単にコメントを加えておく．（21）は主語名詞の特徴付け，（22）は物語現在の文脈，（23）は比較的新しい固定した婉曲語法で，前節2.5.2.1 で扱った否定のモダリティと共通する面がある[27].

（21） （女子中学生の発言）Les garçons et les filles qui sortent ensemble au collège, ils s'embrassent dans la cour. Si un garçon essaie, ça m' intéresse et je *vais* lui *parler*, mais sortir pour sortir, non je ne pourrais pas le faire, je crois.（Larreya : 346）

（22） （歴史）Comme le Charles Ⅶ, la 1ère partie du Siècle de Louis XⅣ respecte la tradition des récits militaires ; mais dans la seconde partie Voltaire *va innover*, en étudiant le gouvernement intérieur [...], la justice, le commerce, la police, les lois, [...]. *L'Essai* comptera presque autant de chapitres sur les mœurs, les institutions, les arts et l'esprit des peuples que sur les événements politiques et militaires.（Larreya : 349-350）

（23） A : Pourquoi tu ne parles plus à Paul ? Tu as une dent contre lui ?
B : *On va dire* ça comme ça ...（Wikitionnaire）

現代話語で珍しくない「特徴付け」の aller + inf は，文脈により現在形，未来形，pouvoir + inf との交代もありうる[28]．出来事の規則性（反復，習慣）が主語を特徴づけるわけだが，同時に規則性が「気まぐれによるかのように意表

---

[27] 以下の論述では，「特徴付け（caractérisation, illustratif）」と「語り（narration）」に関しては， Damourette-Pichon（1662節，1663節），Larreya（2005），川口（2006），Bres-Labeau の一連の研究を参照し，「婉曲（modalisateur）」については川口（id.），Lansari（2010），Bres & Labeau（id.）に言及する．筆者の解釈は川口に多くを負っているが，完全に同じというわけではない．

[28] Larreya は他の動詞形との交代の条件を探っているが，明確には示されていない．

をつく（d'une façon quelque peu déconcertante, comme par un caprice）」（Damourette-Pichon : 1662節）である点がポイントとなる．（21）は，中学校で男の子にナンパされれば，それを受け入れ（ça m'intéresse）自分から話もする（je *vais* lui *parler*）が，自分としてはステディにデートする気はない（sortir pour sortir, non）ということだが，aller + inf の「話をする」ことは予想外の規則的行動だという分析ができるだろうか．出来事の意外性に対する評価からは［図 1 b］だが，反復して X（p）= S が成立することに注目すれば［図 1 a］が近くなり，両者の混合形という解釈も成り立つだろう．

Bres & Labeau（2014）は，「特徴付け」aller + inf の様々な構文条件を精密に記述していて興味深い．また，純粋な総称は主語 X とその特徴 p の関係を必然化してしまうので aller + inf と相容れないことを指摘している．

（24） a. Pierre est un type charmant. Le matin, il *va m'offrir* un bouquet, le soir, il *va m'inviter* au restaurant.（Bres & Labeau : 185）

b. - Et vous, à l'INSERM qu'est-ce que vous faites ?

- Eh bien nous à l'INSERM on *va faire* des études sur la génétique, par exemple, on *va travailler* sur les cellules souches, on *va faire* des études sur l'épistémologie de telle maladie.（Bres & Labeau : 187-188）

X（p）の関係は傾向としてあり反復するが，例外のない規則であってはならない．（24a）は「（例えば）花束のプレゼントをしてくれたり，レストランに招待をしてくれたりする」ことをピエールの好意的態度の証として述べる．（24b）では実際 par exemple という表現が明示するように，列挙されているのは代表的な活動に過ぎない．この用法においても X（p）は X（p'）を排除はしない．

次の「語り」（22）は，歴史（物語）の中で「語りの現在」の文脈に現れる[29]．

[29] 中期フランス語や現代オック語（ガスコーニュ方言），カタラン語では単純過去との交代で用いられるが，現代フランス語では語りの現在形としか交代しないと Bres & Labeau（2012 : 147-148）は指摘する．言い換えれば，pr / aller + inf の区別を考察しなければならないということになる．

20世紀の初頭には消失していたこの用法が現在復活し，特に話語の語りでは一般的であるようだが，報道文にも見られると言う．現在形や語りの未来（単純未来形）との交代は可能なのだが，Damourette-Pichon は「異常なふるまい」用法と共通する「意外性」のニュアンスが認められることを指摘している[30]．（22）はルイ14世の時代前半は「政治と戦争」が支配的だったが，後半にはヴォルテールの活動を通して「内政，司法，商業，治安，法律 ...」の側面にも「刷新がもたらされるようになった（aller +inf）」という内容で，事実確認だけでなく従来の伝統との非連続（意外性）に読者の注意を喚起していると解釈できるように思われる．ただし，続く文はヴォルテールの著作によってこの時代の変化を敷衍し，comptera と単純未来形に移行している[31]．

最後の「婉曲」用法 on va dire は20世紀の話語（ブログなど日常書き言葉を含む）に見られる現象である．構文的拘束は緩やかで，(a) on va dire que ... (b) on va dire + 形容詞 / 名詞句，(c) ... on va dire（文末）が可能で[32]，文脈的には，p が間違いなく確かな事実であるか迷いがある場合（p, mais je ne sais pas trop），p という表現が適切であるかどうかを保留しながら取りあえず p という表現を選択する場合（p mais ce n'est pas le mot juste）があると Lansari（2010 : 131）は記述する．（23）は「ポールに恨みを抱いているのか」と聞かれ，はっきり「そうだ」とは言わずに「まあ，そんなところだ」と on va dire でトーンを下げているということになる[33]．avoir une dent contre という S' が疑問文で使った表現を暫定的に肯定しているのだが，on は S は S' を包含して p を志向

---

[30] "nuance de spontanéité, d'inattendu un peu semblable à celle de l'extraordinaire"（異常な振る舞いの用法とやや類似した任意性や意外性のニュアンス）（Damourette-Pichon : 1663節）

[31] 川口（2006 : 16）は「意外性」を「異常な行為」,「特徴的ふるまい」,「語り」の共通要素とし,「語り」の aller + inf は「特に劇的な状況について用いられるよう」だとしているが，その説明は本稿の説明と重なる部分とずれる部分があるように思われる．

[32] 各構文パターンの例を示す．(a) On va dire poliment que c'est vraiment raté.（Lansari 2012 : 121）(b)（il s'agit d'un film ...）quelque chose de profondément *on va dire* cynique qui ...（id : 121）(c) Ça, c'est la version « officielle » *on va dire*（id : 122）.

[33] Wikitionnaire は次の様にこの表現を解説する．"Expression familière pour signaler à son interlocuteur qu'on ne le cautionne pas forcément sur la forme de ce qu'il vient de dire, mais qu'on l'approuve sur le fond ou qu'on préfère s'abstenir de le reprendre." Lansari の二番目の婉曲のケース（表現についての保留）に該当する .

するが，同時に aller の使用によって一歩下がった分岐点にもいるので，S には p' の可能性が残り積極的な断定にはならない[34]．包摂的な人称代名詞 on と aller の組み合わせによって，強い断定を避けた「最低限の断定（prise en charge «minimale»）」（Lansari : 130）を S は行うことになる．

ところで，S が一部加担する on va dire（婉曲）は S が断定に加担しない on dit（伝聞：～だそうだ）とは明らかに違うが，on dira とはどう違うのだろうか．

（25） *On observera* qu'en règle générale, un même texte est composé de plusieurs types de discours, qui (…) ; *on dira* dans ce cas que le texte concerné témoigne d'une hétérogénéité discursive ou énonciative.（J-P. Bronckart, *Types de discours* : インターネット）

川口（2007）が指摘するアカデミックな文脈（講演，ディベイト）での定型表現である je vous ferai remarquer / je répondrai / on appellera … などと同様に，（25）は fs に認められる話し手 S が S' を取り込む一方的な断定と解釈できる（2.5.1.2節，主体の複数性：S *vs.* S' 参照）．これは Confais（1995）がいうところの「主観的」な performatif（遂行文）に該当する[35]．この場合，je + fs と on + fs の両方が可能で，人称や動詞の種類も dire 以外の広がりを持つ．on dit（≠ je dis）の発言に S の加担はない．on va dire では，S の加担は on によってを緩和される．on dira は，fs が主体間の差異を消すので S は on に解消される．

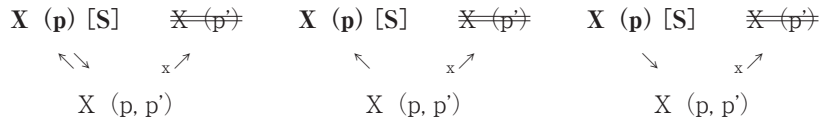
---

[34] je と tu の合意を求める暫定的発話導入の disons … の使い方と on va dire は類似しているのは興味深く思われる．Lansari は，on va dire の代わりの je vais dire … は不可としている．

[35] 未来時に言及する aller + inf と fs の違いを，Confais（399）は前者が「客観」的証拠や他者の言に基づき，後者が自らの直観以外の証拠をもたず「主観」にのみ裏打ちされたと説明とする．「客観 / 主観」は輪郭が不分明な概念だが，純粋な仮定のみに基づいて未来を描けるのは fs ということになる．例．Imagine la vie en 2050 : tu {auras / *vas avoir} un robot qui mettra la table, fera la cuisine … / Si tout va bien, nous {emménagerons / *allons emménager} au printemps.

3. venir

Sのポジションが分岐点に置かれ前景化する aller に対し，venir は分岐点が後景化しSが位置するのは値 p になる．本稿の冒頭に示した基本スキーマ［図２：venir］を再掲し，バリエーション［図２a］［図２b］を加える．



［図２：venir］　［図２a］　［図２b］

［図２a /b］は，二方向性をまとめた基本構図［図２］を一つずつ分解したものに過ぎない．時間の流れに沿って分岐点から値へ向かう［図２a］が認められる文脈と分岐点へ遡る見方［図２b］が有意な文脈があるからである．

aller と同様に，venir の多様な用法を以下，空間移動（3.1），出自解釈（3.2），原因・出現解釈（3.3），最後に3.4 venir（ø / à / de + inf）の順に検討する．その際，空間移動用法をプロトタイプとして固定させ拡張によって用法を位置づけることはせず，基本スキーマとそのバリエーションとして理解する．

3.1 Paul vient à Fukuoka：venir と移動解釈

標記の「ポールは福岡に来る」は，Sの拠点や現在地が着点の福岡であることを含意する．これは到着 **X (p)［S］** がハイライトされることを意味し，aller とは逆に起点（どこから来たか）は背景化する．このことはまた，venir の現在形が aller の場合と違って，未然の「来る」の読みと同時に「来た」という既然の解釈になること（Je viens vous demander un service「あなたにお願いがあって来ました」），「出自」（Je viens de Paris「パリ出身です＜パリから来ました」）や「近接過去」venir de（Je viens d'arriver「今来たところです」）は現在形が使われるが，前望の未然ではなく後望の既然，Sが確認している事態を表すこととも関係があるだろう．

では，起点は無視されているかと言えば，その存在はたとえ de ＋ N のかたちで示されずとも，意味の一部として含まれていると思われる．partir とペア

をなす到着動詞 arriver を venir と比べてみよう.

（26） a. Il est parti, mais il n'est pas encore {arrivé / *venu}.
b. Il est presque {arrivé / *venu} à Paris.
c. Il est {?? arrivé / venu（allé）} à Paris pour faire ses études.
d. Il est déjà {arrivé / venu} à Paris.

Bourdin（1999b）が指摘するように，venir は着点を含む「移動の全体性」を表わし，到着のみを特権化することはできない．逆に，（26a）に明らかなように arriver は前提となる出発（partir）から分離された到着のみを焦点化する．（26b）に見るように着点への最終局面を presque arrivé でクローズアップすることはできるが，出発から到着までの移動プロジェクト「全体」の一歩手前を presque で修飾することはむずかしいこともこの点を支持する[36]．また（26c）が示すように移動主 X に意志性がない arriver に目的を加えることは適切ではない（pour 以下を二次的な補足情報とする必要がある）．命令文 Viens！は可だが，*Arrive！は不可だという事実も，venir（と aller）では，移動を目的と統合したかたちで提示することが可能であることを示す．（26d）の両動詞を比較すると，arriver は当該の到着が 1 回きりの出来事として取り出されるが，venir の場合は単一の出来事解釈以外にも「来たことがある」（経験）という X と着点の関係を質的に特化することがわかる．「経験」解釈は X（p）が，発話時 T では成立していないことや複数回（X fois）成立したことと矛盾しない．これは，X（p, p'）⇄ X（p）の双方向性を意味する[37]．

以上の考察は，venir が「移動の全体性」と「両方向性」（（p, p'）⇄ **p**）を基本に捉えていることを示すが，もう一点，前景化される局面 **X（p）[S]** についても補足が必要であろう．よく知られているように（標準日本語とは違って）

---

[36] Il *est presque venu* à Paris. を可能にする文脈を強いて考えてみれば Il *a failli venir* à Paris（もうちょっとでパリに来るところだった）だと Bourdin は注記していて，やはり移動の全体が対象となる．

[37] 接頭辞の違い *rarriver / revenir も参照．注11に述べたように il est allé à Paris. は経験解釈（行ってことがある）にはなりにくいことにも注意を払う必要があろう．

フランス語や英語では話し手自身が聞き手（27a）や話題の人（27b/c）の場へ移動するときにも venir が使われる[38].

（27） a. Je viens chez toi ce soir.
b. Elle veut que je vienne la voir.

この場合，移動主体 X = je = S なので，分岐点にある je = S は同時に p に位置することはできない（*Je viens chez moi. /（ok）Je vais chez moi.）．ところが，例えば（27a）の場合，S' の要請に従う S は S'（p）のポジションに同化すると考えれば，空間的に着点にいない je（p, p'）とは分離される．実は X（je）と S（S'）は同一項ではないのである．*Je viens chez moi が不可なのは，S が同化する S' が文脈に構築されないからだと考えられる．同様に（27b）で出会いの実現（p）を見ている第三者の立場に同化する S は，分岐点にある je ではなく p のポジションにある elle に同化する主体ということになる．

3.2 venir de : Paul vient de Marseille.

venir を移動動詞とすれば，本節で扱う venir de の出自用法は移動，あるいはそのメタファ拡張と捉えたくなるかもしれない．しかし，この場合も［図 2］X（p, p'）⇄ **X（p）** の X（p, p'）は単なる空間的「起点」ではなく，ポジション移動の全体の意味を解釈することが問題なのである．

（28） Paul vient de Marseille.
a. ポールはマルセイユから来る（来た）.
b. ポールはマルセイユ出身だ.
（29） Ce mot vient du latin.
（30） D'où vient l'erreur ?

[38]（27a/b）で aller を使うこともできる．（27）a' Je vais chez toi ce soir. b' Elle veut que j'aille la voir. aller は S の側（p, p'）から移動を捉えている．

（28）の意味は（28a/b）の二通りある．「今・ここ」での出来事を表す（28a）とは違い（28b）の venir de は X の属性（性質）を示す．一方（29）は語の由来を表すので X の性質の解釈にしかならない．（28a）移動用法の解釈では起点情報（de Marseille）は二次的で，X vient が最小の発話文になるのに対し，表層的には同じ要素に見える de Marseille（28b），du latin（29），d'où（30）は X に値 p を与えることでその「正体（p, p'）」を明かしたり，不明な「正体」の値を求める．この場合，de N は動詞 venir の必須要素となる．実際（28b'）Paul *est de* Marseille,（29'）Ce mot *est* originaire *du* latin，*D'*où *provient* l'erreur ? などとパラフレーズしてみてもわかる通り，de N は X を規定するのに必要不可欠な要素 p になるのでやはり省略することはできない（*Paul est / *Ce mot est originaire / *L'erreur provient）.

「出自」の venir de N（28b）（29）（30）は，いずれも X の正体（出身，語源，原因）を規定する属性文になる．X が de N によってその性質限定を受けるメカニスムは，X が S によって空間限定を受けるメカニスムと同一の venir のスキーマ X（p, p'）⇄ X（p）［図 2］に基づいていると考えてみる．分岐を，時間要素を含む分かれ道からの移動のイメージだけで理解するのは多分間違いで，X（p, p'）→ **X（p）** は，「正体」を知らない主体 S' の立場の移動であり，X（p, p'）← **X（p）** は「正体」を知っている主体 S が知らない主体 S' へと同化する移動に対応する．

移動用法の場合も出自用法の場合も，直接表出される意味（前景）は，**X（p）** であって，X（p, p'）は間接的（背景）にしかその存在を現わさない．「着点」，「正体（出身地，語源，原因）…」が，発話状況（S，T）での X の要素であり，分岐点は発話状況から時空や主体間の隔たりを遡行することで得られる可能性のポジションということになる．移動解釈では X の値 p は［S］（着点にいる S）によって与えられる．出自解釈では S ではなく X の「正体（出身地，語源，原因，…）」は de N を知る主体によって得られる．後者の場合，de N は S に位置づけられる属性 p［S］であると同時に，時空間を遡ることによって得ることができる生成の場所（p, p'）でもあるという両面性をもつことになる．

3.3 出来事 N，性質 N

不定の X へ値を付与する第三のパターンは X が出来事名詞，あるいは性質名詞の場合で，出現や成立すなわち時間的な変化を表す．この場合も出自と同じく，出現は当事者 X の目的や意志に基づくのではなく，「生まれる」「現れる」「できる」あるいは「なる」という日本語が対応する．

(31) La sagesse vient avec l'âge.
(32) Cette année le riz vient {mal / bien}.
(33) Une idée me vient à l'esprit.
(34) Le moment de départ est venu.
(35) Ça vient ?

(31) は「知恵は年とともに作られる」だが，訳の受動態に現れている「(自ずと) できる」という自発性と，「(本物の) 知恵」の出現という質評価の二つのポイントに注目しよう．スキーマに従って解釈すれば，「X の知恵」(X (p)) は「年齢を重ねる」ことによって「なる」(成立する) ので，裏を返せば「年齢を重ねる」ことなしには「知恵」はつかない (あるいは不十分)，つまり X (p, p') ということになる．

(32) の le riz を「稲 (X) が与えてくれる収穫 (p)」とすれば，X (p) は，その十全な (bien) / 不十分な (mal) 実現ということになろう．le riz は具体的なモノであると同時に「収穫」という出来事でもある．

(33) の「ふとアイデアを思いつく」は間接目的語 me (X) に宿った une idée (p) であり，遡行的には未生の段階を (p, p') として想定できないわけではない．une idée は結果であると同時に出来事性を帯びている．時間が「やってくる」の (34) では，いずれくる「別れのとき (le moment de départ)」の存在は「まだ〜ない」(p, p') のモードで前提され，定冠詞が使われる．文主語 X は実現した p であると同時に未然 (p, p') の役割も担う．(35) は，カフェなどで「注文したものはまだですか」という意味で使われる．ウエイターの側からは ça vient (もうすぐです) となるが，注文 (ça) はいずれ提供されるという前提 (p, p') のもとで，その実現 (p) を客は問題にしている．ça は注文の品という

モノであると同時に客への提供という出来事も指している．

以上，3.1～3.3節で見たことをまとめると，venir の基本スキーマにある二つのバリエーション a. X（p, p’）→ **X（p）**，b. X（p, p’）← **X（p）** が，相互に補いあい，**X（p）** を中心として，b. から a. の経路を辿り，**X（p）** へ戻る循環過程と解釈できる．この循環は，X（p, p’）から X（p’）への経路が閉鎖されることによって可能となる．

3.4 venir {ø / de / à } + inf

以下では，venir が動詞を従える用法を検討する．動詞はいずれも不定法で，venir + inf の二用法（目的，生成）を3.4.1節，「近過去」venir de + inf の様々なタイプを3.4.2節，en venir à と venir à + inf の二用法（仮定文，物語）を3.4.3節で扱う．

3.4.1 venir + inf

（36） Il vient me voir tous les jours.

（37） Ces tableaux sont venus s’ajouter aux œuvres que possède déjà notre musée.（小学館仏和大）

（38） Un obstacle venait s’opposer à notre projet.（小学館仏和大）

（39） On viendra peut-être critiquer cette démarche.（ロワイヤル仏和中）

目的を表す venir pour に近い「～しに来る」のタイプ（36）と書き言葉に見られる出来事の出現，生成（～するようになる，～することになる）を表す（37）-（39）のタイプは異なっている．（36）の意味構造は，“（X - inf）- venir”（X は目的 inf に基づいて話者のもとに移動する）と理解されるが，出来事の出現を表す（37）-（39）は “X -（venir - inf）”（X に inf が起きる）と理解される．前者は目的を伴う移動用法と考えればよいが，後者は私たちにとってなかなかわかりにくい．

（37）は「絵画が美術館にやって来る」のだから移動と考えたくなるかもしれないが，実際は「加えられために来る」（モノ移動）ではない．中心となる実質的意味を担うのは不定法動詞 s’ajouter（加えられる）であって venir は文法的

意味とすべきだろう．「美術館」(X) が「新しい絵画の追加」によって新たな姿を見せ X（p)，遡行的に以前の美術館が X（p, p'）として背景に消失していく．3.3節で取り上げた「成立する（なる)」の用法に近く，対象 X（(37)：美術館，(31)：知恵）が新たな属性（(37)：新しい絵画を所蔵，(31)：本物の知恵）を持つことで，同じ名称の以前の X を後退させる．

(38)「障害が起こって計画が妨げられそうだった」は，「妨げになる」(s' opposer）から「障害」(un obstacle）と呼ばれるわけで，「障害の出現」によって X（私たちの計画（notre projet)）が質的な変化を被ることになる．これは既に見た（33）Une idée me vient à l'esprit を想起させる．(39）は，「このやり方」(X）が「批判される」(p）という新たな事態 X（p）が生じることが予想される[39]．

(38)(39）がそうであるように，このタイプの用法には「望ましくない」出来事が生じるという例が多いこと（venir perturber, venir contredire, ...）が目につくが，「不可抗力（偶然性)」という含みがあるだけで，必ずしもマイナス評価ではないことは venir aggraver la situation（状況を悪化させる）とともに venir améliorer la situation（状況を改善する）があることを見てもわかる．

辞書の記述は均一ではないが[40]，出来事が S の意図によらずに生起することがポイントであるように思われる．S は出来事を先取りできないので事態の成立を確認するだけなのである．だが，評価レベル（p, p'）を二次的に導入すること（背景）はあるようで，この結果，「偶発的」な「不可抗力」の「介入」が「(警戒すべき）可能性」であったり「抗議」の含意と特権的に結びつくことになるのではないだろうか[41]．くり返せば，venir ＋ inf は事行の時空間での成立

---

[39] TLF は *on viendra sans doute dire que* ... を「偶発性，可能性」(caractère fortuit ou possible de l'action)，*Ne venez pas dire que* ... ，*Vous venez prétendre que* ... を「動作の強調」(mise en relief）とし用法を分けているが，後者の「強調」はこの場合，S-S' 間の対立を含んでいるように見受けられる．

[40]「介入，偶発性，不可抗力」(小学館仏和大)．「可能性，強調，抗議」(ロワイヤル仏和中)，「偶然，可能；強調」(TLF)，「可能，偶然」(Larousse）など．cf. 尾形（2004)．

[41] J-J. Franckel（1989 : 429-431）は，「マイナス評価（détrimental)」は事行が主体の意図に左右されず時空間に位置づけられてしまうことから生じるとし，多数の文法マーカーを分析している．逆に主体に先取りできる目標がある場合，当然ながら目標は「よい（望ましい，予想できる)」という性質を帯びる．目標が設定されず実現した場合，

X（p）が一次的であり，主体の意図が及ばないがゆえに，遡行的に振り返ったとき「そうならなければよかった」というマイナス評価，あるいはたまたまそうなったという意外性の「強調」の印象と親和することがあるのだと考えたい．

ところで，Bres-Labeau は最近の一連の研究（2013b, 2013c）の中で，aller + inf の否定モダリティ（Damourette-Pichon の「異常なふるまい」用法．cf．本稿2.5.2.1節）と同じような主体のマイナス評価をもつ venir + inf があることを強調している．例えば，話し言葉に観察される Ne {viens / va} pas {croire, me dire} que … のタイプでは aller / venir の交代がローカルに起きることを指摘している．詳細の検討をする余裕はここではないが，異なるマーカーによる類似の意味効果は上に記述したスキーマに基づく異なる解釈過程によって生まれるので，原則的には同等に扱うべきではないし，文脈上の制約もあるのではないかと予想される．

3.4.2 venir de + inf

近過去は基準時との近接性を表すと言われるが，それは何を意味しているだろうか．「近接」という印象はひとまず置き，具体的にどのような制約があるかを見る．

第一の重要な制約は，前節の venir + inf（複合過去（37/38），未来形（39））と違って，（40b）にある通り現在形と半過去形以外は認められないということである．この制約は発話時 T への参照だけでなく[42]，本稿の重要論点となる発話者 S / S' への参照が必須であることも意味する．

第二の制約は，（40f）で観察できる否定形の排除になる（venir + inf は否定形可能）．さらには，3.2節で検討した「出自」の venir de + N と venir de + inf のかたちの類似から生じる意味的関連はあるかという問題もあるだろう．

（40） a. Je viens（juste / seulement / à peine）d'arriver.

値は事前選択できないので「悪い（望ましくない，意外，偶然）」という価値と結びつき，忌避の対象となることが多い．

[42] 発話時（T）を過去にずらした過去基準発話時（T'）が相似的に機能することは広く知られている．以下では，venir（半過去）de + inf の例については特に論じない．

b. *Je suis venu d'arriver. / *Je viendrai d'arriver

c. *Tu viens d'arriver quand ?

d. *Hier, je viens d'arriver. / *Je viens d'arriver il y a une heure.

e. ? Je viens d'arriver hier.

f. *Je ne viens pas d'arriver.

事行成立時（t）は発話時（T）に先行し「近接」しているという印象は，t と T の隔たりが縮小できる，極端に言えば同一とみなせるという事実から来ている．t は T と区別された時間限定を受けることはできないので，（40b）の複合過去や（40c）の「いつ？」の質問，（40d）hier, il y a … などの時の副詞は不可となる[43]．すなわち，「いつ」と個別化して特定できず，「ほとんど今」成立した出来事だということになる．近接過去と相性のよい三つの副詞　juste, seulement, à peine（40a）は，p（il - arriver）の成立を T で確認すると同時に制限をかけている[44]．簡単に言えば，juste / seulement / à peine p は p であることと「p でしかない」ことを意味する．

しかし，この場合「p でしかない」は何を意味するのだろうか？到着時 t を仮に t_j とし，t_j から時間を遡る流れを $t_i \leftarrow t_j$ と表す（t_j よりわずか早めの t_i を想定する）．上記の制限副詞は，t_j（p）［T］（事行 p 成立を発話時 T で確認）と t_i（p, p'）［T］（T で想像された先行時 t_i で p が未然：まだ成立していない）を表現している．上に述べた通り t_j を直接的には特定できないので，T と t_i を媒介の参照時として事行の成立時 t_j が特定化される．一方では T と同一化され，他方では t_i と t_j が p の成立に関して差別化される（t_i（p, p'），t_j（p）［T］）．近接過去が持つ二つの意味，すなわち（１）事行成立：$t_j \rightarrow$ T（p）の時間の流

---

[43] ただし，（40d）/（40e）の差異には注目しておいた方がよい．後置（40e）は，付け加えのイントネーションであれば，T に位置づけられた後，補足的に t へと位置づけられれば制約が解除されると思われる．

[44] juste，seulement，à peine などのマーカーについての詳細な議論は本稿では行わないが，いずれも基準値に達しているがそれ以上でではないことを表す．それぞれがどのような領域で働くかについては，Culioli（1997 / 1999），小熊（1993，2012）参照．また，関連する日本語の「～したところ」については青木（2000），「～したばかり」については Oguma（2001）を参照．

れ，時間遡行の（２）制限：t_i（p, p’）← t_j（p）の二点によって近接過去の意味が把握される．これは，［S］を［T］に置き換え，［図２a］［図２b］の相補バリエーションを参照すれば理解できる．

次に，発話場面のパラメータ主体（S, S’）の観点から出来事がどのように捉えられるかを検討する．（40a）は具体的にどのような文脈で発話されるかを考えてみよう．（１）「いつ着いたの？」という質問に対して「ちょうど今着いたところ」．（２）「今着いたばかり」（だからちょっとゆっくりさせて / だからこの事情はまだよくわからない，など）．

例えば（１）は成立時 t（p）［T］に言及しているが，（２）はＳが p をどう見ているかに発話意図があり，「確かに着いたことは着いたけれど，…」という譲歩構造に依拠した弁明になっているように思われる．これは対話相手 S’ の期待との不一致があるため生じる文脈的意味とすべきであろう．文脈は venir de を構成する意味に取り込む必要がある．例えば，到着早々 S’ に話しかけられＳは話についていけないというような場面が（２）には想定できる．

（１）の T に関わる意味構造とは別に，（p, p’）［S］← p［S’/S］という主観的意味合いのずれによる venir の意味構造を考えてみる．S’ の言動への リアクションとしてＳが venir d’arriver を発話する．ＳもS’ も t_j［T］での実現（p）を認める arrivé という事態が S’ にとって意味するところとＳにとって意味するところは常に同一ではない．juste / seulement / à peine などの制限副詞は，主体間調整の働き，すなわち arrivé からほんの僅か時間を遡行し，まだ成立していない t_i（p, p’）［S］から導かれる主観的値が S’（p）との違和として表明される．

類似の解釈は，ネーティブとしての直観と作例に基づいて，venir de + inf の働きを過去時（t）に定位することではなく，発話時（T）にある別の「偶発的な状態（état contingent）」事態 Q を「特定化」（spécifier）して「必然的な状態（état nécessaire）/ 特化された状態（état qualifié）」へ導くことであると見たてる Franckel & Lebaud（1990），Lebaud（1989, 1992）にも見いだせる．「偶発的な状態」を「必然的な状態 / 特化された状態」という限定操作はどう理解すべきだろうか？

（41） - Tu as écouté la radio ce matin ?
- Non, je viens de me réveiller.（Lebaud, 1989）: 137）

（41）の venir de + inf が喚起するのは「目覚めた」という事実ではなく，質問にある「ラジオはまだ聞いていない（のでニュースは知らない）」ということをサポートとする文脈である．質問を無視して「目覚めた」かどうかだけを言うなら，Je me suis（bien）réveillé と複合過去になろう．ここでは，Q：je n' ai pas écouté la radio ce matin（et je ne sais pas la nouvelle）を支え，正当化しているのが，Je viens de me réveiller だと Lebaud は考える．例えば，Non（, je n'ai pas écouté la radio ce matin）だけでは物の言い方に愛想がないと感じられるのであろう．venir de + inf の発話は前後の発言や状況を補い，理由を説明し，対話相手が十分納得できるように「必然的な状態」（（41）：起きたばかりなのでラジオをまだ聞いていない：Q → Q ／（p, p'））に変える．

ここで提案している分析は，必要な変更を加えれば，3.2節で見た出自（出身，語源，原因）の venir de N の分析と軌を一にする[45]．すなわち，（28）-（30）では主語となる X に「正体（出身，語源，原因）…」となる de N が加えられ，X（p, p'）を経由して X（**p**）と安定するが，venir de + inf 構文では，不安定な X が文脈にある発話あるいは状況 Q に対応し，venir de N に対応するのが venir de + inf ということになる．従って，「人物 X（主語）」と「出身地による特定（de N）」の関係は，「文脈（Q）」と「説明（venir de inf）」の関係と平行して捉えられることになるわけである．

ところで，本稿の基本的立場となる Lebaud 説に対して，Le Monde や Le Point の報道文に現れる venir de + inf を検証した生田（2001 a/b）の反論があり，Lebaud の「（文脈上の）偶発性を特定化（正当化）」するという一般化では説明できない意味効果をもつ例が存在すると言う．以下，その文脈（１）記事の冒頭部（読者の関心を引きつける），（２）関係節内（読者に想起を促す ／心理的影響の残存）を，Lebaud 説の読み直しと本稿の枠組みで考察してみ

[45] この論点は Lebaud（1989：125-126），Franckel-Lebaud（1990：168）に負っている．佐藤（2005：34）も参照．

る[46].

（42）（台湾での新幹線受注の経緯）Le groupe franco-britanique, associé à l' allemand Siemens（…）, *vient de perdre* la bataille qui risque de lui coûter cher. Taïwan *a décidé* de confier à un consortium japonais emmené par Mitsubishi,（…）la réalisation de la ligne TGV reliant（…）（生田 2001a : 96, 例文（５）, *Le Point*）

（43）（米国防省予算を通過させた上院軍事委員長が国連を非難）Le sénateur John Warner, président de la commission des forces armées au Sénat, qui *vient de faire adopter* un budget de 300 milliards de dollars pour la Pentagone, *a accusé* ONU d'entreprendre « trop d'opérations militaires, sans pour autant en avoir les moyens »（…）（生田 2001a : 99, 例文（９）, *Le Monde*）

（44） a. Ce que je *viens de voir a déchiré* mon cœur.（Damourette-Pichon : 1766節）

b. Monsieur WG, très touché de la sympathie que vous lui *avez témoigné* dans le deuil cruel qui *vient de* le *frapper*, vous adresse ses sincères remerciements.（id.）

（41）は報道記事の冒頭部で「英仏が台湾の新幹線建設受注競争に破れた」ことを伝えているが，生田は「（Lebaud が主張する）正当化の対象にするものは（後続文に）見当たらない」とし，このような場合は venir de + inf が普通で複合過去は現れないことも観察している．さらに，venir de + inf は報道文の冒頭で，むしろ主題（テーマ）を導入し，その後この主題について「詳述，敷衍」（陳述，レーマ化）しているとし，venir de + inf は冒頭の主題（テーマ）に「読者の関心を引きつける」効果をもたらすとする．

この記述の意味するところを本稿の枠組みで解釈すると次のようになる．まず読者に伝えたい「主題（テーマ）X」（英仏の敗北）が発話時（T）の値とし

[46] 佐藤（2005 : 35-38）も Lebaud 説の観点から生田の論をコメントしている．

て導入され，さらに詳細を知りたいという読者を不安定な位置（X（p, p’）[S’]）へと導く効果を獲得することになる．書き手（S）が読者（S’）が知らないと想定する情報を伝えるのが報道記事だが，読者に期待されるのは詳細（なぜ英仏が敗北したか）を知りたいという感情である．書き手にとっては，主題（テーマ）となる事実の意味するところ（前後関係）は透明で安定した情報（**X（p）[S]**）なのでS／S’の間には同一事実（英仏の敗北）に関してSが「関心を引き寄せる」ために構築した戦略的な非対称関係があることになる．書き手は t_j（p）[T] には成立した事実が t_i（p, p’）時には未然であったことを言明することで，出来事の緊迫感を喚起する効果もあるかもしれない．仮に複合過去にした場合，Sは事実を自立し安定した値pとして当初から提供してしまうので，このような値の二重性（**p**,（p, p’））は得られない．報道文で主題（テーマ）となる情報の提示はS’に問を喚起し，レーマ（説明，敷衍）を要求せずにおかないのである．

関係節に現れる venir de inf（43）（44）にも同様のメカニズムが働いている．一般的に言えば，主節よりも情報が背景化される関係節はSとS’が共有すべき情報を提示し，主題（テーマ）として主節の理解を補佐する．（43）「上院軍事委員長J.Wが3000億ドルの米国防総省予算を通した」（関係節：venir de + inf）は，生田の指摘するように「財源もないのに，やたらに軍事行動を起こしたがると言ってJ.Wが国連を非難した」（主節：複合過去）に先行している．関係節の情報の確認，すなわちp［S］→（p, p’）［S’］→ **p［S／S’］** がここでもメインとなる主節発話の前提をなす．Sは主節（Q）を主張するに当たって，S’（p）を所与のこととして確認して置く必要がある．

ところで，（43）には，主節の「国連非難」の後に，ロシア側の皮肉な発言「莫大な国防総省予算に比べれば，たかが知れている国連分担滞納金15億ドルをアメリカが支払いさえすれば，国連はその機能を果たせる」が続いていて，主節の「非難」の背景となる関係節の発言内容「米国の莫大な軍事予算成立」（p）に新たな情報の光が当たる[47]．言わば，「3000億ドルの予算を通した」ことの正

[47]（43）の続き：« … », à quoi le Russe Serguel Labrov a calmement répondu : « Si les Américains payaient ce qu’ils doivent à l’ONU, c’est-à-dire 1, 5 milliards de dollars, l’ONU serait en mesure d’assumer ces opérations. Franchement, comparé au budget

当性が揺らいでくるのである．このことは，「国連非難」の背景説明となるはずの p を事後的に再び（p, p'）に送り返しているとも解釈される（3000億ドル拠出できるが，15億ドルは無理？）．読者は「国連分担金の滞納」という公平性の欠如を知ることで，関係節と主節の意味関係を，「自国での莫大な軍事予算 <にもかかわらず> 国連分担金の滞納」という譲歩構文として読み直すことになる．（43）は関係節の venir de inf が説明提供（図 2 a）と説明要求（図 2 b）の二重の機能を担っている．

（44）は「近い過去」のはずの venir de + inf の出来事が複合過去の出来事に先行する「パラドックス」の古典的な例として研究者に知られている．これも venir de + inf が複合過去文に対して主題（テーマ）を構成していると考える．「私は何かを目撃した」（44a）も「不幸が WG を襲った」（44b）に主節のレーマ「私の胸は張り裂けそうになった」，「あなたがお悔やみを伝えたことを WG があなたに感謝している」が続く．テーマになる情報（私は目撃した，WG に不幸があった）は，それ自身，時間軸上に場所のある完結した情報（p）だが，S にとってはレーマ（私の胸は張り裂けた，あなたの弔意に WG が感謝している）と結合することでしか意味をもたない．換言すれば，事実としては共有されるだろう p［S / S'］は，S の発話意図にとっては二次的な情報だという見方も成立する．メインとなる情報（主節）によって初めてテーマ（関係節）が意味をもつことになるからである．テーマ・レーマ構造に基づく S / S' の非対称的解釈過程が，venir de + inf が構築する主体ポジション移動の説明原理となると考える[48]．

なお，Lebaud（1992）も，venir de + inf が「特定（正当化）」する前後文をいつも想定するわけではないということは意識しているようで，「特定化（正当化）」の典型から逸脱したと見える例として次の（45）を挙げ，venir de + inf

---

du Pentagone c'est négligeable !

[48] Vetters（1989）は，venir de + inf と複合過去を逆転させると不自然になると言う．（a'）? Ce que j'*ai vu vient de déchirer* mon cœur.（b'）? Monsieur WG, très touché de la sympathie que vous *venez de* lui *témoigner*, dans le deuil cruel qui l'*a frappé*, vous adresse ses sincères remerciements. 二つの事行が時間的に関連しているとき，venir de + inf → 複合過去になるのが正常なことがわかる．これはテーマ→レーマの順と一致する．

は「新たなテーマを導入する」と説明している．

（45） Tiens, au fait, je *viens de voir* Delphine, elle m'a dit que ses cours lui plaisaient beaucoup.（Lebaud, 1992 : 174）

「新たなテーマ」の導入は，「相手とのコンタクト（rapport à la situation d'énonciation）を保ちつつも断絶を図る（décrochage à la situation d'énonciation）」働きをするとされる．au fait（ところで）により新たなテーマ「最近 D と会った」(P) でまず話題の枠を作り，続いて D の近況のコメント「出ている授業が面白いんだって」(Q) をすることで P - Q をセットとする安定した発話になるという理解になるだろう．P の導入（au fait P）はそれ自身唐突であるが，いきなり新情報「D は授業が面白いんだって」を導入すれば，これまた唐突に感じられる．新たなテーマ P を先行させることで Q の導入が自然になり，またレーマ Q が逆に P の話題転換を自然にする．P（venir de + inf）はレーマを期待させ，Q（レーマ）は構造上テーマ（P）を召喚する．これは，S / S' の非対称性を安定させるための談話戦略とみなせる．

まとめれば，Lebaud のいわゆる「特定（正当）化」用法の venir de + inf P は，文脈にある不安定な状況 Q に発話文 P を添えて p を共有しつつ（p, p'）に遡行することで Q を安定させ［図 2 b］，生田が指摘した主題（テーマ）提示の venir de + inf P は，(p, p') の不安定を主題（テーマ）として安定させる［図 2 a］ことで容易に説明（レーマ）Q を導入することができるということになる．

3.4.3 venir à + inf, en venir à + inf

（46） a. S'il *vient à mourir*, cette entreprise aura des difficultés financières.（ロワイヤル仏和小）

b. S'il *venait à mourir*, cette entreprise aurait des difficultés financières.

（47） a. Il *vint à passer* un homme sur le lieu de l'accident.（ロワイヤル仏和小）

b. Au bout de cinq ou six semaines, les vivres *vinrent à manquer*.（童謡）

venir　à には二種類の文脈（si 節，語り）があるが，両者に共通する点がある．一般的に言えば，si が導く仮定節は，S が S' と対立することなく事態を虚構の発話空間に提示する（Supposons que … に現れる nous の痕跡）[49]．si と venir à ＋ inf の組み合わせは，不測の事態（万一～のようなことがあれば）を表す．他方，語りの文脈では，venir が単純過去となる．これは，周知のように Benveniste のテクスト類型論でいう “histoire”（vs. “discours”）で，発話空間と切断された出来事が時間軸に沿って継起的に立ち現れ，発話空間の存在条件である主体 S, S' は姿を消す．Benveniste の有名な定式では，「語り histoire」の空間は，「ここでは誰も語らない．出来事は自ずと語られているように思われる」“Personne ne parle ici ; les événements semblent se raconter d'eux-même”（*Problèmes de linguistique générale* 1 : 241）と特徴づけられるが，si 節も「語り」も，S / S' が区別されることがない主体（S_x と表記しておく）が，値 p を担うと考えることにする．

なぜ venir（à）なのか？ここまで venir の基本スキーマとしてきた，前景となる選択値 p とセットをなす背景の分岐（p, p'）はどのように理解できるのだろうか．仮定文の場合は，出発点となる現実発話空間の主体 S, S' は（p, p'）に片足を残している．同時に，「万一」のモードで，もしもの事態（(46)「彼の死」）を S と S' が融合した S_x が特権的に仮定の値 p として取りあげることにこの venir が貢献しているものと思われる．

語りにおいて venir à ＋ inf が表す出来事には，予期せざること，しかし物語の進展上なんらかの重要性をもつことという二つの特徴を読みとることができるように思える（(47a)「ある男がたまたま事故現場へ立ち寄った」，(47b)「気がついたら食料が底をついていた」）．物語は新たな展望を与える段階へと一歩進展し，それで次にどうなるかという緊張を読者に強い，物語に参加するように促しているのではないだろうか．この場面で語りの主体 S_x が内包する相互的主観性（S vs. S'）があらためて意識されるのは，物語の重要ポイント「他ならぬ p」が生起する時点で，様々な可能性（p, p'）が 1 点に収斂したからとは言えないだろうか．

---

[49] si についての詳しい考察は，小熊（2015）参照．

この「語り」の用法は，venir de + inf について上に分析した主題（テーマ）提示の用法と類似しているところがある．ただ，venir de は S / S' が支配する発話空間内で成立した事態についての新たな問いかけであるのに対し，本稿の仮説が正しければ venir à は「自ずと出来事が語られる」(Benveniste) 物語空間内で，語り手が読者への喚起を仕組むという異なりはある．いずれも，p ⇄ (p, p') という動的なポジション移動図式が考えられるのである．

ところで，venir à + inf が，S_x が構築する前景 p（仮定，物語）から出発し，発話空間の潜在的 S / S' 関係が介入することで遡行的に背景（p, p'）が想像されるとすれば，同じく前置詞 à と組み合わされる移動動詞 arriver à inf はどのように解釈されるだろうか．venir à も venir de も，inf（p）の成立（venir à : S_x（p），venir de : S（p））から出発し主観的に（p, p'）に遡行するが，分岐点から否定に向かうことは不可である（p ⇄ (p, p') の円環）．これに対し，arriver à（成功）/ ne pas arriver à（失敗）の対称性からもわかる通り，主語 X の目標 p へのチャレンジ（p, p'）→ p から出発し，結果は肯定・否定両方向に開かれている．arriver à + inf（= réussir à）では，結果が成功（p）であれ失敗（p'）であれ主語 X の主観評価 **p** は常に残る．

3.1節で移動動詞としての venir について，その特徴となる全体性 {(p, p'), p} を論じた．venir の場合は，X にとって常に背景となる（p, p'）が前景 p とセットになっている．このことは移動の意味の場合，起点（p, p'）での可能性（主語 X の意志や外的要因）を問題にすることができることにも現れている．例えば，Il n'est pas venu は事実としての結果以外に（p, p'）を X の意志の問題として再解釈できることを意味している．すなわち，場合によっては Il n'a pas voulu venir（alors qu'il aurait pu venir）「来れたのに来ようとしなかった」とも読める．同様に，il est venu は，il est venu quand même（malgré lui）ということもありうる．逆に arriver は結果しか表さないので，事実の解釈以外はない．結論としては，venir では X（p, p'）の事実性とは別に X（p, p'）[S] も背景には潜在的にあるということになる[50]．

---

[50] 類似の現象として，arriver à inf の同義語とされる réussir à inf には，事実と S による評価のずれが生じることが挙げられる．例えば，Il {a réussi à / *est arrivé à} tout gâcher.（彼はすべてを台無しにしてくれた）．arriver à は p の実現と S の評価が常に

最後に，en venir à + inf / N（ついには～するに至る）という固定表現の特徴と制約を，類義の en arriver à と対比しながら見ることにする．

（48） a. J'*en viens à* ne plus croire personne.（ロワイヤル仏和小）
b. J'ose espérer que le gouvernement *en viendra à* prendre les mesures nécessaires pour régler ces questions.（Linguee）

en venir à は，venir à と違って発話空間での既然（（48a）：私はもう誰も信じなくなった）とも未然（（48b）：政府がこれらの問題解決に向けて将来必要な政策を取ってくれるように希望させていただく）とも馴染む．いずれも，主語 X は消極的ながら出来事 p を選択する．（48a）では，不本意ながら「誰も信じなくなった」のであり，（48b）は「政府が将来必要な政策を取る」ことはなかなか困難であろうということは j'ose espérer（敢えて希望する）から推測できる．en venir à の en は具体的に特定できる要素はないが，事態出現に至る状況（p, p'）を漠然と指していると考えてもよいだろう．事態に関わる p と S の評価に関わる（p, p'）の二重ポジションを考慮に入れる点で，en venir à は venir à（万一の仮定，予想外で重要な語りの展開点）と類似性があると言える．

（49） a. Tout ça pour en arriver là !（ロワイヤル仏和小）
b. J'en arrive à imaginer {le pire / ?? le plus favorable}.（Franckel et al., 1992 : 15）
c. J'en arrive à souhaiter {qu'il crève / qu'il meure}.（id.）

他方，類義表現 en arriver à は，一般的には望ましい事態よりも望ましくない事態に至ることに親和する．（49a）は「あれだけ頑張ったのに結果がこれか」で，S 結果に不満足である．（49b）は「最悪の事態を想像するに至った」で「よい結果を想像する」とは相性が悪い．（49c）は「彼がくたばればいい / 死んで

一致するが，réussir à は S の評価と p の実現を異化することが可能で，その場合は皮肉の効果が得られる．

しまえばいいと願うようになった」と願望の souhaiter が呪いの意味合いを帯びる．en arriver à と en venir à は「望ましくない」結果に至るという意味を共有しているように見える．

Franckel et al.（1992 : 15）は，en venir à と en arriver à を比較し，前者は主体の関与（visée）を許す「必然的（inévitable）結果」，後者は主体の関与（visée）を逃れた「不可避な（inévitable）結果」と見ている．「必然（不可避）」であるとは，（p, p'）から p へなるべくしてなった（p' の排除）ということであり，違いは主体のコントロールが後者にはないが前者にはありうるということだが，両者の違いはなかなか微妙である．

（50） a. J'{en viens / en arrive} maintenant à (discuter de) l'exemple le plus délicat.（Franckel et al. : 16）

b. J'{en arrive à / ?? en viens à} dire n'importe quoi.（id.）

c. A vouloir toujours flatter le musulman pour récupérer des voix (électoralement) ; il *en vient à* dire n'importe quoi et insulter les français ; quel mépris.（インターネット，L'Obs，読者の投書欄）

（50a）「一番微妙な例」は，en venir à では発表者が論じるタイミングを最初から折り込んでいるという（en arriver à では予期しない例が生じた）．en venir à は p が予定としてあるからこそ時間軸上での実現が起こるべくして起きたという必然に転化するが，en arriver à は p が偶然生じたことを避けることができない必然と解釈するわけである．命令文の可否 Venez ! / *Arrivez ! からも arriver に計画性がないことは納得できる．

（50b）では「私がでたらめを言う」には当然計画性はないので，en venir à が不適切で en arriver à が選択される．逆に同じ「でたらめを言う」も（50c）のように起こるべくして起こったと認められれば，en venir à が可能となる．「選挙票獲得」の下心があるので，実際は犠牲者のマグレブ人はキリスト教徒であったにもかかわらず，予断でイスラム教徒が犠牲者と言ってしまった大統領の「でたらめな言動」は偶然ではなく，発言した大統領の必然に属するということになろう[51]．

終わりに

aller と venir は,「視点」を論じるときに特権的対象となる動詞だが，その論点は移動用法と主語人称の制約に限定されるのが常である．もちろん，aller は起点から移動を捉え，venir は話者視点が着点にあるという原則に疑念はない．しかし，aller や venir の多様な用法，とりわけ aller + V, venir + V（venir de V, venir à V, en venir à V）の解釈と制約はどう考えるべきか，時間性と主観性はどう関係しあうかという問が本稿の考察の出発点にあった．分析概念として，X（移動主体），S（話者），S'（共話者）が定位する項のパラメータ（存在と評価）に関してとる値 p とその否定 p'，アクセスポイント（p, p'）を用い，それぞれの間でどのような基本ポジションと動的バリエーションを作るかを，詳細な言語記述につきあわせ理論的に考察した．筆者のこれまでの研究がそうであるように，分離することのできない時空間と主観性の問題を概念領域（p, (p, p'), p'）の問題系を媒介にして接ぎ木したことになる．

aller については，空間移動に加え ça va や X va + à 人の評価用法，さらに命令形を使った間投詞用法があり，実現目標となる値 p の出発点（分岐点（p, p'））が基本的に前景，あるいはスキーマの要（図１）をなす．分岐点から p' への可能性を残すこと，文脈配置や解釈に応じて意味の前景・背景の構成が変わり，三つのポジション p,（p, p'), p' それぞれにハイライトが当たりうることを論じた（図１a，図１b）．aller + inf は，発話時と連続して時間軸に定位される用法（近未来），モダリティ用法（異常なふるまい，主語の特徴付け，語り，婉曲）を検討し，いずれも（p, p'）のポジションが p と p' を繋ぐ有意なポジションとして機能することを見た．すなわち，近未来用法では「断絶」を特徴とする fs と比較し，T（発話時）にある S は異なるポジションを潜在的にもつ S'（自問自答の相手でもある）との相関で分岐は p へと連続しつつ p' を考慮している．他方，後者モダリティ用法では，文脈での実現あるいは想定値 p に対し S のマイナス評価が突出する「異常なふるまい（否定評価）」用法，X の傾向を例

[51] Franckel et al. が挙げている次の例も（50 b/c）と類比の対照を示している．a. Ils ont commencé à s'injurier, puis ils en sont {venus / ? arrivés} aux mains. b. Il faut intervenir avant qu'ils n'en {viennent / arrivent} aux mains.

示するにとどまる「特徴付け」用法，現在形と比べ意外性を喚起する「語り」用法，断定や表現選択にためらいを導入する on va dire の「婉曲」用法を分析し，p（inf の内容）を事実として認めながら，S がそれぞれ何らかのかたちで p' を臨んでいることを明らかにしようと試みた．いずれも，発話文に注釈を加えることで，主体間関係のパラメータの役割と共通するこの動詞の基本ポジションのあり方の理解を深めることができる．

venir に関しては，aller とは逆に，前景となる p に対し，背景となる見えにくい（p, p'）を意識化することに努めた．基本スキーマとなる p の優位性，（p, p'）の背景化，p' の排除（図２）を，まず主語 X の移動用法，出自用法（出身，語源，原因），出来事や性質名詞について生成用法（出来る，なる）を見渡して論じた．次に，venir + inf（生成），venir de + inf（近過去），venir à + inf（si 節，語り），en venir à（～に至る）の構文的，意味的制約を類似の表現と比較しながら事例に注釈を加えて分析した．分析にあたっては時間と評価の観点から図２a の（p, p'）→ **p** / 図２b の **p** →（p, p'）に依拠して解釈を加えた．venir + inf は，不定詞が目的を表す移動用法とは別に偶発性，意外性，否定評価などを含意する生成用法（～ことになる）があり，図２b で理解できる．venir de + inf の時間的近接性は，事態成立時 t_j（p）[T] ⇄ 先行時 t_i（p, p'）の図式で説明した．近接性以外に，先行研究が論じてきた談話機能（特定化と主題化）を総合的に理解するために，発話時 T とともに発話主体 S を導入し，「特定化」用法は S が p を主観的に（p, p'）へと戻すことで文脈・状況 Q を説明し（図２b），「主題化」用法は陳述（レーム）を導入する前提としての p を S' と共有するために主題を提示する（図２a）ので，ポジションの移動はいわば逆方向に働く．前景・背景は S の発話が S' との同化を重視するか，異化を重視するかによって反転するが，二つのポジション間の円環運動があることが venir の特徴となる．最後に，venir à が要求する二つの文脈（si 節，語り）を取りあげ，S / S' が融合する主体 S_x が p に位置するが，背景に発話の相互依存主体 S / S' が取るポジション（p, p'）が想定されることを論じた．また en venir à は未然，既然を問わず（p, p'）→ **p** が必然の経路であることを表す成句であり「望ましくない」実現となる傾向があることを指摘した．

文献

［日本語］
阿部宏（2012）「空間移動の意味拡張について－「くる」と venir の場合」『川口順二教授退任記念論集（web 版）』
安生恭子（1999）「venir de inf. について」*Etudes françaises*（大阪外国語大学）32
生田夏樹（2001a）「迂言形 venir de + infinitif の意味効果について」『ヨーロッパ言語文化研究』（岡山大学）20
____（2001b）「venir de + infinitif の用法をめぐる一考察　－報道文での用例を主体として－」『フランス文学』（日本フランス語フランス文学会（中国・四国支部）23
大久保伸子（2005）「venir de infinitif と半過去の機能について」『フランス語学研究－木下教授喜寿記念論文集』白水社
尾形こづえ（2004）「助動詞性と本動詞性－「venir de + 不定法」構文の文法化－」『コーパスに基づく言語研究－文法化を中心に』ひつじ書房
小熊和郎（1993）「＜トコロダ＞と aller, venir de, être en train de + infinitif アスペクトとモダリティの関連を巡って」『西南学院大学フランス語フランス文学論集』29
____（2012）「副詞 juste とその周辺」『川口順二教授退任記念論集（web 版）』
____（2014a）「フランス語現在形と不定性」『フランス語学の最前線 2』ひつじ書房
____（2014b）Je ne descends pas mais je descendrai : 未来を表す動詞形［フランス語質問箱］『フランス語学研究』（日本フランス語学会）48
____（2015）「si の多義性と発話操作　－断定・他性・主体のポジション－」『フランス語学の最前線 3』ひつじ書房
川口順二（2006）「モダリティ動詞 aller」『藝文研究』（慶應義塾大学）91- 3
____（2007）「未来表現をめぐって」『藝文研究』（慶應義塾大学）92
佐藤正明（2005）「Venir de infinitif 再考」『福岡大学研究部論集（人文科学編）』5 - 1
____（2006）「Venir de infinitif と原因の複合過去－因果関係の二つの配置－」『福岡大学研究部論集（人文科学編）』6 - 3
西山悦代（1996）「VENIR DE + infititif について」『仏語仏文学』24，関西大学
渡邊淳也（2013）「単純未来形と迂言的未来形について」『文藝言語研究 . 言語篇』63，筑波大学（『フランス語の時制とモダリティ』2014，早美出版社所収）

［欧文］
Aoki, S.（2000）Les formes lexicale et grammaticale de *tokoro* “endroit” en japonais. *Travaux linguistiques du Cerlico* 13
Bres, J & E. Labeau（2012）“De la grammaticalisation des formes *itive*（«aller»）et *ventive*（«venir»）” Saussure L. de & A. Rihs（éds）*Etudes de sémantique et pragmatique françaises*, Peter Lang
_____（2013a）“*Aller* et *venir* : des verbes de déplacement aux auxiliaires aspectuels- temporels- modaux” *Langue française* 179- 3
_____（2013b）“Allez donc sortir des sentiers battus ! La production de l’effet de sens extraordinaire par *aller* et *venir*” *Journal of French Language Studies* 23- 2
_____（2013c）“（Des）amour（s）de *venir* avec l’extraordinaire...” *Le français moderne* 81- 1

_____ (2013d) "The narrative construction va + infinitive in Contemporary French: A linguistic phoenix rising from its medieval ashes?" *Diachronica* 30-3
_____ (2014) "About the illustrative use of *aller* + *infinitive*", *Evolution in Romance Verbal Systems*, Labeau E. & J.Bres (éds), Peter Lang
Bourdin, P. (1992) "Constance et inconstances de la déicticité: la resémantisation des marqueurs andatifs et ventifs", M. Morel & L. Danon-Boileau (*éds*), *La Deixis,* PUF
_____ (1999a) "*Venir de* et la récence: un marqueur typologiquement surdéterminé" *Cahiers Chronos* 4
_____ (1999b) "Deixis directionnelle et 'acquis cinetique' : de 'venir' à 'arriver', à travers quelques langues. *Travaux Linguistiques du CerLiCO* 12
_____ (2003) "On two distinct uses of *go* as a conjoined marker of evaluative modality" Facchinetti, R., Krug, M. G., & Palmer, F. R. (Eds.) *Topics in English Linguistics*, 44
____ (2005) "*Venir* en français contemporain : de deux fonctionnements périphrastiques" Bat-Zeev Shyldkrot & Le Querler (éds), *Les périphrases verbales* John Benjamins.
Celle, A & L, Lansari (2015) "On the mirative meaning of aller + infinitive compared with its équivalents in English." *Taming the TAME systems* 27
Confais, J-P (1995 / 2002) *Temps, mode, aspect: les approches des morphèmes verbaux et leurs problèmes à l'exemple du français et de l'allemand*. Presses Univ. du Mirail
Culioli, A. (1997 / 1999) "A propos de la notion" *Pour une linguistique de l'énonciation* T3, Ophrys
Damourette, J. & E. Pichon (1911-1936) *Des mots à la pensée*, t. v, d'Artrey
Deschamps, A. (2006) "Forme schématique des prédicats. Remarques sur quelques verbes de déplacement" Cycnos 23-1
Forest, R. (1999) *Empathie et linguistique*, PUF
Franckel, J.-J. (1984) "Futur « simple » et futur « proche »" *Le français dans le monde* 182
Franckel, J.-J. & D. Lebaud (1990) *Les figures du sujet : à propos des verbes de perception, sentiment, connaissance,* Ophrys
Franckel, J-J, D. Lebaud & A. Lhopital (1992) "Arriver", *L'information Grammaticale*, 55-1
Lansari (2009) *Les périphrases verbales* aller + inf *et* be going to, Ophrys
____ (2010) "*On va dire* : vers un emploi modalisant d'*aller* + infinitif" *Cahiers chronos* 21
Larreya, P (2005) "Sur les emplois de la périphrase *aller* + *infinitif*" *Les périphrases verbales,* John Benjamins
Lebaud, D. (1989) "VENI, VIDI … VICI ? Eléments d'analyse en vue d'une caractérisation générale du marqueur VENIR" J-J. Franckel (éd.) *La Notion de prédicat*, Paris 7
____ (1992) "*Venir de* infinitif" *Le gré des langues* 4
Oguma, K. (2001) "Particules énonciatives en japonais : le cas de *bakari*" *Faits de langues* 17.
Pauly, E. (2004) "Polysémie et lexicographie. Vers une semantique lexicale appliquée :

l'exemple du verbe *aller*" *Cahiers de lexicologie* 85
Soriano, S.（2006）"Interjections issues d'un verbe de mouvement : étude comparée français-espagnol." *Langages* 40
Sundell, L-G.（2003）"Le futur modal revisité" *Aspects de la modalité, M. Birkelund* et al（éds）, Max Niemeyer Verlag
Vetters, C.（1989）"Grammaticalité au passé récent" *Lingusiticae Investigationes*, 13